

ペリーの認知的発達段階説に基づく学習評価と助産学教育での試行

Learning evaluation based on Perry's theory epistemic cognition and trial in midwifery education

中島奈美^{1,2)}

Nami NAKASHIMA

九州看護福祉大学看護福祉学部 1) 熊本大学大学院 2)

Kyushu University of Nursing Social Welfare Kumamoto University Graduate School

＜あらまし＞ 助産学専攻科は専門職者の養成課程である。学習内容が現場で活かせるレベルで習得されることが望ましい。2021年「母子関係の援助論」の授業において、家族関係の理論に関する学生の認知と思考が、ペリーの認知的発達段階説のコミットメント段階へ移行することを期待して、学習目標を、「家族関係の理論を踏まえ、助産師として自分ができることを述べる」に定め、授業設計をして実施した。科目修了時の課題レポートでは、全員が学習目標に達することができた。コミットメント段階への移行とは、事象への「理解」に関して、自身の文脈に引き込んでの転移であると考える。今回の設計で良かった点は、評価基準をペリーの認知的発達段階説の4つの段階にしたこと、そのことをはじめに学生と共有をしたこと、「詩歌鑑賞」「ケアの最新動向の紹介」を行ったことが考えられた。

＜キーワード＞ 高等教育、看護教育、インストラクショナルデザイン、授業設計、授業実践

1. 背景

2021年度、助産学専門科目「母子関係の援助論」を担当し、授業を設計し実施した。学習目標を、「家族関係の理論を踏まえて、助産師として自分ができることを述べる」に定め、学習活動を支援した。この目標は学生の認識と思考が、ペリーの認知的発達段階説のコミットメント段階¹⁾へ移行することを期待するものであった。科目の前半では、目標達成ができず、授業設計の追加修正を行った。科目終了時のレポートでは、全ての学生が目標達成したと評価できる内容になった。

今回の設計と実施を振り返る中で、コミットメント段階への移行とは、事象への「理解」に関して自身の文脈に引き込んでの転移であると考えられた。助産学専攻科は専門職者の養成であり、学習内容は実際の現場で活きるレベルでの習得が望ましい。そうなるための「転移」と「自身の文脈に引き込む」とペリーの認知的発達段階説について考察し報告する。

2. 実践の概要

1. 科目と学習者の概要

科目：母子関係の援助、助産学専攻科必修、1単位。
開講は通年15時間8コマ(90分/コマ)。

対象学生：助産学専攻科の学年10名。入学時に学士と看護師免許の取得をしている。

2. 授業設計

前期3コマ、後期5コマの時間割を予定した。
学習目標は前・後期にそれぞれに定めた(表1,2参照)。

学習の評価方法は、学習目標3についてのレポートを求め目標の1,2を含むことを要件とした。

① 前期の設計

表1 前期の学習目標

前期3コマ

- | |
|---------------------------------|
| 1. 母親・父親役割獲得に関する理論を説明できる。 |
| 2. 助産師国家試験出題レベルの社会の現状と課題が説明できる。 |
| 3. 学習目標の2をふまえて、自分が臨床でできる限りを述べる。 |

授業計画

家族と社会状況の理解について、具体化を助産師国家試験問題で行った。抽象化を共同学習と関連図作成で行った。最後に「自分が助産師としてできること」のレポートを課した。(図1参照)。

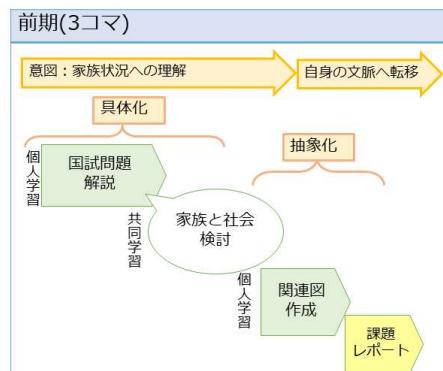


図1 前期の授業設計

②前期の結果と設計の評価

感染対策のため、急遽遠隔での授業になった。Zoomで授業を行った。課題中心の設計であり、遠隔授業の対応ができた。関連図作成の実施は、8割の学生にとどまった。レポートの内容は、自分が実施できる限りが具体的なものはなかった。レポートの内容が深まらなかつた要因として、具体化と抽象化の機会が不十分であったと考えた。

③後期の設計の修正と実施

表2 後期の学習目標

後期5コマ

1. 親子の出会いと関係づくりを具体的な事例で紹介できる。
2. 親子関係の調和を促すもの、そうでないものを説明できる。
3. 親子関係調和の支援で自分が臨床でできる限りを述べる。

授業計画

はじめにレポートの評価基準をペリーの認知的発達段階説の4段階で行うことを学生と共有した。内容では、課題図書に『NICU こころのケア』『誕生死』を挙げた。共同学習はペア学習にした。死産ケアでは、講義でケアの最新動向を研究から伝えた。この講義に妊娠・出産・育児に関する詩歌鑑賞を追加した。最後に「自分が助産師としてできること」のレポートを課し、評価対象にした(図2参照)。

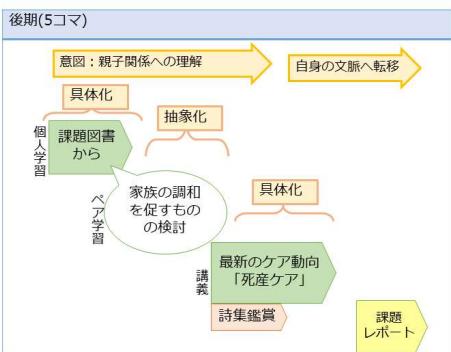


図2 後期の授業設計

④後期の結果

対面での授業実施であった。全員が、授業に出席し、レポート課題の提出ができた。ペア学習と詩歌鑑賞では、相手の状況を考えようとする記述や自身の役割を考える内容の記述が自ら行え、能動的に取り組めた。レポート内容は、臨床の現場での助産師としての独自の取り組みや具体的な方法、また実施時の考え方等が示され、全員がコメント段階と評価できた。

3. 考察

前期が学習目標に達しなかつたが、対照的に後期は学習目標に達した。「理解とは転移に関する事である。真に有用であるためには、学んだことを新しい設定、時には困惑させられるような設定に転移させる能力が必要である」と言われる。自分ができることの記述は、「自身の文脈へ引き込こんでの転移」が起こったと考える。今回の設計で効果的であった点を考察する。

1.「転移」を促すペリーの認知的発達論説での評価

後期に学習目標の評価基準としてペリーの認知的発達段階説の段階を示した。そのことで活動の目的が明確化するとともに、事象のとらえ方に段階を付けることが可能になったと考える。そのことで自身のとらえ方を客観視をして、絶対主義段階や相対主義段階に留まらず、上位の段階へ自ら移行しようとしたと考える。

2.「自身の文脈へ引き込むことと「詩歌鑑賞」「ケアの最新動向」

「詩歌鑑賞」では、自身の感じ方を素直に表現し、それが受け入れられる機会となった。また、「ケアの最新動向」はケアの方法の幅を広げる意図を意図した。このことで慣例的ではなく、理論を踏まえての独自のケアや自分を場に入れて状況に合わせた方法を考えることが促されたと考える。

3.ペア学習で共同学習の活発化

後期は、共同学習をペア学習で行った。人数が限られ自分の責任範囲が明確することで学習活動は活発になったと考える。「転移」も「自身の文脈へ引き込むこと」も活発な学習活動に支えられたと考える。

引用文献

- 1) 鈴木克明、美馬のゆり編著(2018) 学習設計マニュアル、北大路書房
- 2) G. ウィギンズ、J. マクタイ著、西岡加奈恵訳(2012) 理解をもたらすカリキュラム設計・「逆向き設計」の理論と方法、日本標準